

愛媛教職員組合交流会 「えひめ夏物語」

2016年7月30日(土)、国立療養所“大島青松園”の施設見学に行きました。

ハンセン病の医療

ハンセン病は、ハンセン氏によって1873年(明治6年)に『らい菌の体内侵入による慢性感染症である』ことが解ったことに因んで名付けられた疾患である。治療開始後数日で感染性は失われる。治療は、病状により1回・6ヶ月・12ヶ月・24ヶ月間の薬剤投与が行われ、治癒する。ハンセン病は末梢神経・皮膚および眼に主として症状が現れる。早期発見と確実な治療が行わなければ、不可逆的な後遺症を残すことがあり、治療終了後の社会生活に重大な支障を来すことがある。WHOは「世界で、2000年に、人口1万人に1人以内の患者数にする」を目標として活動している。現在、世界の登録患者数は約70万人であるが、年間に約70万人の新発見がある。年内に発病した患者数は一割程度しか見つからず、さらに有効性のある対策が必要である。日本国内では、現在数名の新患者が発見されるが、ハンセン病療養所に入所している人々のほとんどは近代的な治療を受けることができず、多くの後遺症を残してしまった。1996年(平成8年)に『らい予防法』が廃止された。しかし、入所者の社会復帰対策は彼らの高齢化・身体障害・偏見差別観の存在により、わずかしこ進展していないのが現状である。

出典：国立療養所大島青松園ホームページ (<http://www.nhds.go.jp/~osima/>)

○ 磯野さん(入所者)との交流会報告(越智)

入所の小学5年生(11才)のときから75年間の話聞いた。西条市立神戸小学校の校医が、2年前にハンセン病で亡くなった父親を診察した人だったので、顔のむくみを見て、ハンセン病と診断したのだった。小学4年生までは、スポーツも学習も得意な元気な子どもだったそうだ。青松園では3つの小学校があり、磯野さんの入った学校は患者の学校で、読み書きや計算ができる人(もちろん免許がない人)が教え、卒業もできなかった。防空壕ほりや、重症者の世話をしたりして、治療どころか、よけい重症化した。神戸小から最近、卒業証書を発行していただいた。

(西条の銘菓「星加のゆべし」のお土産は、非常に喜んでいただきました。)

《参加者感想》

- ◆ 青松園を訪ねた。一緒にいる時間だった。今まで私は一緒にいる時間をもたなかったのだ。もてなかったのではなく、もたなかったのだ。で…一緒にいる時間は何だったのか。それは磯野さんの話にも、磯野さんにも、切実に出会える人間的なものの、ごく具体的な情念がひびき入ってきた時間であったことだ。私にはあの時間の磯野さんが伝わってきたことで、大島青松園の学びが非常に深いものとなった。話しを聞いて、学びをしているという関係が鮮明

に生まれた。あの時ほど、同じ人間として一緒に生きるという共生感を激しく感じたことはない。この私の情念は、磯野さんの情念と細密に結ばれたし、その衝動を読書会の人々に伝え、さらに、確信がその中で広く人々の確信ともなって広がり深まった。（伊藤）

- ◆ 大島青松園へは初めて行きました。よい研修となりました。時間が足りなくて残念でしたが、また別の機会に行けたらよいと思っています。みなさん、ありがとうございました。（加地）
- ◆ 特効薬の存在は患者にいつ、誰に、どんなふうに伝えられたのか。特効薬を使うのに自己負担があったのかを知りたい。明確な返答をえられなかった。長い時間が過ぎてしまったからかな。それにしても明るさと記憶力には驚きました。越智さんの奥さんのエピソードを思い出します。（田中）



磯野さんとの交流の様子



モニュメント「風の舞（魂が風に乗って、ふるさとに帰れるように…）」の前で

子どもたちと教職員の生活を守るため、共に考えましょう!

私たち愛媛教職員組合は、年に数回、研修会（研究会）・交流会を開催し現場での力量を高めています。ぜひ、ご参加いただき共に学びましょう。

質問や感想がございましたら、お気軽にご連絡ください。

TEL(089)924-4546 / FAX(089)924-4403 / e-mail jtuehime@lime.ocn.ne.jp

HP <http://jtuehime.sakura.ne.jp/>

愛媛教職員組合 書記長 堀 剛

